TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★★☆ ながい 964語

# The Grateful Foxes

## おんをかえしたキツネ

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ やさしいお春さまは、男の子たちにつかまった子ギツネをお金でたすけてあげます。やがて、お春さまが重い病気になって……。

It was springtime in Japan, and the blossoms hung thick on the cherry trees.

Butterflies and dragon flies fluttered over the golden colza flowers in the fields.

The rice birds chirped merrily. Everything seemed to say, “How good it is to live in days like these.”

A beautiful princess, O Haru San, sat on the bank of a stream gaily pulling the lilies.

All the maidens of her court were with her.

Along the river bank came a troop of noisy, laughing boys, carrying a young cub fox. They were trying to decide who should have its skin and who its liver.

At a safe distance from them, in a bamboo thicket, father fox and mother fox sat looking sadly after their little cub.

The princess’ heart was filled with pity, and she said:

“Boys, pray loose the little fox. See his parents weeping in the rocks.”

The boys shook their heads.

“We shall sell the fox’s skin,” they said. “The liver, too, if well powdered, will be used to cure fevers in the fall.”

“Listen,” cried O Haru San, “It is springtime, and everything rejoices. How can you kill such a small soft beast?

“See, here is twice your price; take it all,” and she drew copper money and silver money from her girdle.

The boys placed the little frightened animal in her lap and ran away, pleased to be so rich.

The cub felt the touch of her soft hand, and trembled no longer. She loosened carefully the knot and noose and string.

She stroked the red fur smooth again, and bound up the little bleeding leg. She offered it rice and fish to eat, but the black eyes plainly said, “This is very nice, but I hear my parents grieving near yonder beanstraw stack. I long to go and comfort them.”

She set the little fox gently on the ground, and, forgetting its wounded leg, it leaped through the bushes at one happy bound.

The two old foxes gravely looked it over neck and breast.

They licked it from its bushy tail to its smooth, brown crown. Then, sitting up on their haunches, they gave two sharp barks of gratitude.

That was their way of saying, “We send you thanks, sweet maid.”

As she walked home by the river side, all the world seemed more beautiful to O Haru San.

The summer time came and the blossoms upon the cherry trees became rich, ripe fruit. But there was no joy in the emperor’s house.

His daughter, the gentle O Haru San, was ill. She grew paler and weaker each day. Physicians came from far and near, and shook their wise heads gravely.

When the emperor’s magician saw her, he said, “No one can heal such sickness. A charm falls upon her every night which steals away her strength. He alone can break the spell, who, with sleepless eyes, can watch beside her bedside until sunrise.”

Gray haired nurses sat by her until morning, but a deep sleep fell upon them at midnight.

Next fourscore maidens of the court, who loved her well, kept bright lights burning all the night, yet they, too, fell asleep.

Five counselors of state watched with her father at the bedside. Though they propped their eyes open with their fingers, yet in the middle of the night slumber overcame them.

All believed that the gentle maid must die.

The emperor was in despair, but Ito, a brave soldier, said, "I shall not sleep; let me one night guard the sweet O Haru San."

Her father led him to the chamber. Just at midnight Ito felt his eyes grow heavy.

He rose and held his sword above his head. "Rather will I die than sleep," he said.

Then came a great struggle. Often his head nodded, but by his love and strength Ito conquered sleep.

Suddenly he heard a voice which said, "Grate foxes' livers in the princess' rice broth and all her ills will disappear."

The next morning the hunters searched far and near for foxes. They knew that to the emperor a fox was worth its weight in gold. All day and night they were in the woods without food or rest.

At last they came sadly back to their homes. They brought no fox.

"All the foxes know," they said, "and have hidden themselves away."

The emperor in grief and anger cried, "Must my child perish? Shall a princess die for the lack of one poor fox?

"She was never willing that one should be slain and this is her reward."

Ito said, "I will get the fox." He started out with knife and net to seek it.

At the entrance of the town he met a woman dressed in strange garments. Very small and stooped she seemed to Ito. She carried a jar in her arms. She bowed low before Ito, and said, “What you seek is in the jar. I have brought it from afar.”

“Here is gold,” said Ito. “What is the price?”

The woman pulled the blue hood farther over her face and said, “Another time will do, I can wait. Hasten now to the princess.”

Gladly Ito obeyed.

They made the broth in a bowl of beaten gold and fed it to O Haru San.

Immediately she was well and all was joy in the emperor’s house.

The emperor said, “Ito, is she, who brought this blessing, paid?”

Ito answered, “Yonder she waits at the entrance of the town.”

The emperor himself in his great joy went with Ito to meet her.

But they found only a dog-fox dead.

Around his neck they read this message, “This is my husband here.

“For his child he gives his liver to the princess, dear. I, his very lowly wife, have brought it.”



## 和訳 おんをかえしたキツネ（The Grateful Foxes）

日本は春で、サクラの木には花がたくさんさいていました。

畑の金色のなの花の上を、チョウやトンボがひらひらとんでいました。

田んぼの鳥たちが楽しそうにさえずっていました。何もかもが、「こんな日に生きているのは、なんてすばらしいんだろう」と言っているようでした。

美しいおひめさまのお春さまが、小川の岸にすわって、楽しそうにユリをつんでいました。

おつきのむすめたちも、みんないっしょでした。

川の岸ぞいに、男の子たちがわいわいさわぎ、わらいながら、子ギツネを持ってやって来ました。男の子たちは、その毛皮をだれがもらい、きもをだれがもらうか、決めようとしていました。

男の子たちから少しはなれた竹やぶの中で、お父さんギツネとお母さんギツネがすわって、悲しそうに子ギツネを見つめていました。

おひめさまは、かわいそうでたまらなくなって、言いました。

「みなさん、どうかその子ギツネをはなしてあげて。ほら、親ギツネが岩の間でないていますよ。」

男の子たちは首を横にふりました。

「キツネの毛皮は売るんだ」と男の子たちは言いました。「きも も、よくこなにすれば、秋のねつをなおすくすりになるんだよ。」

「聞いてちょうだい」とお春さまはさけびました。「今は春で、何もかもがよろこんでいるのよ。こんなに小さくてやわらかい動物を、どうしてころしたりできるの？

「ほら、あなたたちのねだんの二ばいあるわ。全部持っていきなさい」と言って、おひめさまは、おびからどうのお金と銀のお金を取り出しました。

男の子たちは、こわがっている小さな動物をおひめさまのひざにおくと、お金持ちになってよろこびながら走っていきました。

子ギツネは、おひめさまのやわらかい手にさわられて、もうふるえなくなりました。おひめさまは、むすび目とわなとひもを、ていねいにほどきました。

赤い毛をなでてまたなめらかにしてやり、血の出ている小さな足に、ほうたいをまいてやりました。ごはんや魚をあげようとしましたが、黒い目ははっきりとこう言っていました。「とてもうれしいけれど、あそこの豆がらの山のそばで、お父さんとお母さんが悲しんでいるのが聞こえるの。早く行って、安心させてあげたいんです。」

おひめさまがそっと地面におろすと、子ギツネはけがをした足のこともわすれて、ひととびでうれしそうにしげみをとびこえていきました。

二ひきの親ギツネは、子ギツネの首やむねを、しんけんな顔でしらべました。

ふさふさのしっぽから、なめらかな茶色の頭のてっぺんまで、なめてやりました。それから、うしろ足でおすわりをして、ありがとうの気持ちをこめて、コン、コンと二回するどく鳴きました。

それは、「やさしいおじょうさん、ありがとう」という、キツネたちなりのあいさつでした。

川ぞいを歩いて家に帰るとき、お春さまには、世界中がいっそう美しく見えました。

夏が来て、サクラの花は、よくじゅくした実になりました。けれども、みかどの家には、よろこびがありませんでした。

みかどのむすめ、やさしいお春さまが病気になったのです。お春さまは日に日に青白く、弱っていきました。お医者さんたちが近くからも遠くからもやって来ましたが、むずかしい顔をして、首をふるばかりでした。

みかどのまほうつかいはお春さまを見て、言いました。「このような病は、だれにもなおせません。毎ばん、のろいがおひめさまにかかって、力をぬすんでいくのです。一ねむりもせずに、朝日がのぼるまでまくらもとで見はっていられる者だけが、そのまほうをとくことができるのです。」

白いかみのばあやたちが朝までそばにすわっていましたが、真夜中になると、ふかいねむりにおちてしまいました。

次に、お春さまを大すきな八十人のおつきのむすめたちが、ひとばんじゅう明かりをともしていましたが、やはりねむってしまいました。

五人のだいじんが、お父さんといっしょにまくらもとで見はりました。指で目をおし開けていましたが、真夜中になると、ねむけに負けてしまいました。

みんな、やさしいおひめさまは死んでしまうのだと思いました。

みかどはすっかりきぼうをなくしていましたが、イトウというういさましいへいしが言いました。「わたしはねむりません。ひとばん、お春さまをお守りさせてください。」

お父さんは、イトウをへやにつれていきました。ちょうど真夜中に、イトウはまぶたが重くなってくるのを感じました。

イトウは立ち上がり、刀を頭の上にかかげました。「ねむるくらいなら、死んだほうがましだ」とイトウは言いました。

それから、大きなたたかいがはじまりました。何回も頭がこっくりしましたが、お春さまを思う心と強さで、イトウはねむけに勝ちました。

とつぜん、声が聞こえました。「キツネのきもをすりおろして、おひめさまのおかゆに入れなさい。そうすれば病はすっかり消えるでしょう。」

次の朝、かりゅうどたちは、近くも遠くもキツネをさがし回りました。みかどにとっては、キツネ一ぴきが同じ重さの金ほどのねうちがあると、知っていたからです。かりゅうどたちは、昼も夜も、食べず休まず森の中にいました。

とうとう、かりゅうどたちはがっかりして家に帰ってきました。キツネは一ぴきも持っていませんでした。

「キツネたちはみんなわかっていて、かくれてしまったのです」とかりゅうどたちは言いました。

みかどは悲しみといかりでさけびました。「むすめは死なねばならないのか？キツネたった一ぴきがいないせいで、ひめが死ぬというのか？

「むすめは一ぴきの命もうばわせなかったのに、そのむくいがこれなのか。」

イトウは言いました。「わたしがキツネを手に入れてまいります。」イトウはナイフとあみを持って、さがしに出かけました。

町の入り口で、イトウはふしぎな服を着た女の人に会いました。その人はとても小さく、こしが曲がっているように、イトウには見えました。女の人は、うでにつぼをかかえていました。女の人はイトウの前でふかく頭を下げて、言いました。「おさがしのものは、このつぼの中にございます。遠くから持ってまいりました。」

「ここに金がある」とイトウは言いました。「いくらだね？」

女の人は青いずきんをさらに顔ふかくかぶって言いました。「またのときでけっこうです。待てますから。今は、早くおひめさまの所へ。」

イトウはよろこんで、そのとおりにしました。

人々は、金をうちのばして作ったおわんでおかゆを作り、お春さまに食べさせました。

たちまちお春さまは元気になり、みかどの家はよろこびでいっぱいになりました。

みかどは言いました。「イトウよ、このありがたいものを持ってきてくれた人に、お礼ははらったのか？」

イトウは答えました。「その人は、あそこの町の入り口で待っております。」

みかどは大よろこびで、自分でイトウといっしょにその人をむかえに行きました。

けれども、そこで見つかったのは、死んだお父さんギツネだけでした。

その首には、こんな言葉がありました。「これは、わたしのおっとです。

「子どものために、おっとはおひめさまに自分のきもをさし上げました。「おっとのつまである、つつましいわたしが、それをおとどけしたのです。」

## たんご と クイズ　おんをかえしたキツネ

| | | |
|---|---|---|
| cherry trees　サクラの木 | Butterflies　チョウ | princess　おひめさま |
| fox　キツネ | bamboo　竹 | sword　刀 |
| jar　つぼ | | |

**Q1** お春さまは、子ギツネをどうやってたすけた？

① 男の子たちをしかった　② お金をはらった　③ こっそりにがした

**Q2** 真夜中にねむらずに、お春さまを見守ったのはだれ？

① ばあやたち　② だいじんたち　③ へいしのイトウ

**Q3** つぼを持ってきた女の人は、本当はだれだった？

① 子ギツネのお母さんギツネ　② まほうつかい　③ お春さまのばあや

**こたえ**

Q1　②　男の子たちのねだんの二ばいのお金を、おびから取り出してわたし、子ギツネをたすけました。

Q2　③　ばあやも、むすめたちも、だいじんもねむってしまいましたが、イトウはねむけに勝ちました。

Q3　①　首の手紙に『おっとのつまであるわたしが、それをおとどけした』とありました。女の人は、子ギツネのお母さんだったのです。

**原田英語の多読ベストジュニア**
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

**出典**　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。